

育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす  
影響に関する予備的検討  
—父親の育児行動に対する評価に着目して—

Preliminary Study on the Effects of Childrearing Stresses on Mother's Identity  
: Focusing on Father's Childrearing Behavior

山下 倫実  
Tomomi YAMASHITA

加藤 陽子  
Akiko KATO

石田 有理  
Yuri ISHIDA

**【要 約】**

本研究の目的は、3歳未満の幼い子どもをもつ母親が親としてのアイデンティティを獲得していく過程で、育児ストレスと父親の育児行動がどのように関与するのかを予備的に検討することであった。仮説は「1. 母親の感じる育児ストレスは母親アイデンティティの獲得にネガティブに関与する」、「2. 父親の育児行動が高く評価されている場合、育児ストレスの高さに関わらず母親のアイデンティティは肯定的なまま維持されるが、父親の育児行動が低く評価されている場合、育児ストレスが高くなるほど母親のアイデンティティは否定的になる」であった。Web上で調査が実施され、現在3歳以下の子どもをもつ母親98名（平均年齢33.91歳）が調査に協力した。各母親アイデンティティ（自信のなさ、効力感、受容、逃避）を目的変数とし、Step1に統制変数として母親の属性、Step2に育児ストレスと父親の育児行動、Step3において育児ストレスと父親の育児行動の交互作用項を投入し、階層的重回帰分析を行なった。その結果、仮説1は支持されたが、仮説2は支持されなかった。しかし、父親が子どもや母親に対して育児行動を頻繁に行なう場合、母親の育児不安が低くなるほど母親は親としての効力感を高めることがわかった。また、父親が母親への支援を行なう場合、父親の支援のなさによるストレスを感じるほど母親の親としての効力感が高まることが示唆された。このような結果が示された理由及び今後の展望について考察した。

## 【問題】

近年、人口減少と少子高齢化の急速な進展に対する危機感から、社会が女性に求める役割は多様化の一途をたどっている。日本政府により平成19年には「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」、平成27年には「女性活躍推進法」が策定され、多様な働き方・生き方が選択できる社会の実現を目指すという目標の下、家庭と職業生活を両立することが可能な働き方を実現するために、法律の整備や行動計画の策定が進められている。

このような時代背景のなかで、女性たちは自己実現につながるような仕事と、十全な育児の両方をやるべきだという2つの価値観に挟まれている（中野，2014）。岡本（1996）によれば、成人期においては、人は様々な社会的役割や家庭的役割を担い、複数のアイデンティティを有するが、多くの成人男性は、職業人としてのアイデンティティを太い幹としたライフコースを歩むのに対して、女性は職業、家庭、個という様々なアイデンティティを自己の内部で統合しつつ、成人期を生きることが求められるという。ただし、社会が女性に求める役割の多様化は、以前と比較して女性のアイデンティティの統合を複雑なものにしている。そこで本研究では、女性のライフコースが多様になっている現代社会における今日的問題として、母親アイデンティティに関与する要因を検討する。

これまで、岡本（1996）は育児期における女性のアイデンティティの様態と家族関係について検討している。そして、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティを両立している統合型について以下の3つの特徴を指摘している。第1に、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの両方も確立が不十分な未熟型より家庭生活に満足していること、第2に、個としてのアイデンティティの達成度は低いが、母親アイデンティティがよく達成されている伝統的母親型より、夫からよく理解・受容されていると認知していること、第3に、未熟型より家族に対して積極的に関与していることを示している。

また、中村（2010）は、母親の居場所感（受容感、安心感、役割感、所属感）に影響する要因について検討し、「家」や「保育園／幼稚園」の両方でアイデンティティという母親の内的要因が影響することを示している。具体的には、自分が自分であるという一貫性を持っているほど、家での安心感、役割感、所属感が高くなり、現実の社会の中で自分らしい生き方ができているという感覚を持っているほど、家での受容感が高いことが示されている。また、保育園／幼稚園での所属感や役割感は現実の社会の中で自分らしい生き方ができているという感覚を持っているほど高くなり、安心感や受容感は周囲から理解されていると感じるほど高くなることも示唆されている。以上より、個としてのアイデンティティに加え、結婚や出産に伴う新たな役割を受容し、妻や母親としてのアイデンティティが無理なく獲得されることが、よりよい夫婦関係や子育ての環境を整えることにつながると考えられる。

しかし、妻としてのアイデンティティと比較して、母親としての役割を受容することで生まれる母親アイデンティティを獲得することはより困難を伴うことが予測される。なぜなら、夫婦2人の時にはお互いのために費やしていた時間は圧倒的に少なくなり、家事や子どもの世話にかかる時間は増え、職業生活の中断を余儀なくされ、経済的な負担が重くのしかかることになる。そのため、出産後に結婚の満足度が低下することを示した研究は多く（中澤ら，2003；Belsky & Kelly，1994）、個として、妻としてのアイデンティティ自体が揺らぐ状況に置かれることが推測される。特に、Belsky & Kelly（1994）によれば、新しく母親になった人は不安、落ち込み、自信のなさなどに悩まされる。このような母親の気分の変動の多くは子どもとの独特の関係から生じていると考えられ、子どもに対する思い入れがあま

りにも強いために疲れ果ててしまったり、自分は子どもが必要とするほどの愛と思いやりを与えることができるだろうかかと悩んだりするという。また、小野寺（2013）は、妊娠後期から親になって3年間の間に自己概念がどのように変化するかを縦断的研究によって追跡し、妻の自尊感情は母親になると低くなり、「怒り・イライラ」が強まることを明らかにしている。このように、出産後の母親にとって、育児は睡眠不足や身体的な疲労を伴うだけでなく、精神的な消耗も激しい経験であり、このような育児に伴うストレスは母親アイデンティティに大きく関与することが予測される。したがって、揺らいでしまった個として、妻としてのアイデンティティを再構築し、母親としての新たなアイデンティティを獲得していくためには、周囲のサポートが不可欠であると考えられる。

これまで、配偶者からのサポートが多ければ多いほど、抑うつ傾向が低くなり、夫婦間での問題解決がよりよく行われていると評価され、結婚生活満足度も高くなることが明らかになっており、配偶者からのサポートはよい影響をもたらすことが示されている（Katz et al., 2000）。また、母親アイデンティティと周囲のサポートとの関連を示唆する研究として、Pridham et al. (1991) は、親になることへの評価は出産への準備、出産時のサポートとストレス、出産後の学習資源の有用性などの要因が関連していることを示している。特に、牧野（1982）は夫婦関係の良さや夫が子育てを一緒にしてくれているという評価、家族以外の広い人間関係、子供から離れる活動などが育児に対する好ましい態度と関連することを明らかにしている。また、夫婦関係の評価得点の高い群は低い群と比較して、育児満足度を構成する6要因のうち、夫のソーシャル・サポートに対する評価得点、自己効力感、母親役割受容の積極的・肯定的受容得点が高いことが明らかになっている（佐藤, 2012）。岡本（1996）は、パートナーとの関係性は女性のアイデンティティの発達にとってサポートや励ましの機能を果たすことを示唆しており、夫のサポートは不可欠であると考えられる。

ただし、実際には父親は「育児参加している」と感じているにも関わらず、「父の育児参加に満足していない」母親が4割弱であるとの報告がある（宮木, 2014）。また、父親の育児は母親の育児とくらべると一時的、補助的な、いわば気が向いた時の育児となりがちであり、そのような父親の育児のあり方自体が母親にとってのストレスを増大させる可能性があると言われている（西尾, 2013）。社会の現状を鑑みても、女性に対して労働と家庭生活の両立を求める社会へと変容しつつあるとはいえ、やはり子どもを育てるのは女性の仕事という意識は根強い。内閣府（2015）によれば、短時間勤務を選択できる事業所の割合は2014年で14.8%となっており、男性の育休取得率は2.03%となっている。また、6歳未満の子どもを持つ父親の育児・家事関連時間は67分と低水準の推移が続いているのが現状である。したがって、育児を行なう母親が育児ストレスを軽減し、子育てをする自分の役割を肯定的に受容するためには、父親の効果的で、実際的なサポートが必要とされることが推測される。つまり、父親が育児サポートをしてくれるであろうというサポート期待や、情緒的／情動的／道具的といった一般的なソーシャル・サポートの評価ではなく、父親の実際に行なっている育児行動について検討する必要があると考える。また、西尾（2013）によれば、父親の育児に対して、父親の育児評価が母親の評価よりも高くなるほど母親の育児ストレスが高まることが示唆されており、父親の育児行動については、母親がそれをどのように評価しているかを指標として用いることが望ましいと考える。以上をふまえ、本研究は母親が親としてのアイデンティティを獲得していく過程で、育児ストレスと父親の育児行動がどのように関与するのかについて検討する。仮説は以下の通りである。

仮説1：母親の感じる育児ストレスは母親アイデンティティの獲得にネガティブに関与する

仮説2：父親の育児行動が高く評価されている場合、育児ストレスの高さに関わらず母親のアイデン

ティティは肯定的なまま維持されるが、父親の育児行動が低く評価されている場合、育児ストレスが高くなるほど母親のアイデンティティは否定的になる

## 【方法】

### 調査協力者

平成28年3月から4月まで、マクロミル社Webアンケート作成ツール「クエスタント」を用いて、現在3歳以下の子どもの子育てを行なっている母親を対象にWeb上でのアンケート調査を実施した。98名の母親が本調査への回答に協力した。調査協力者の平均年齢は33.91歳 ( $SD=6.04$ ) であり、結婚した年齢の平均については29.90歳 ( $SD=3.71$ ) であった。現在の子どもの数については、1人が57名、2人が29名、3人が9名、4人が3名という内訳であった。なお、本調査の実施については、本学の倫理審査委員会の承認を受けている（番号：2015-041）。

### 質問項目

質問を開始する前に、調査協力者のプライベートな情報について尋ねる項目が多数存在するため、①回答は全て記号化されコンピュータで統計的に処理されるため、個人的に迷惑をかけることはないこと、②回答しづらい項目については、その質問には回答せず、次の質問に移ってよいことを教示した。また、調査協力者が最後まで回答することをもって、本研究への参加の「同意」とすることについてもWeb調査の最初のページに明記した。

#### 1) 母親の育児ストレス

清水・関水（2010）の「育児ストレス尺度（CSS短縮版）」を用いて、母親の育児ストレスを評価した。16項目について、「1. 全く感じない」から「5. 非常に感じる」の5件法で回答を求めた。「子どもの世話で他にやりたいことができない」、「子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる」といった心身の疲労（6項目）については $\alpha = .831$ 、「子どもの知的能力に気がかりがある」、「同じ年頃の子どもの様子を知ってわが子が劣っているのではないかと不安に思う」といった育児不安（6項目）については $\alpha = .829$ 、「夫が子育てに協力的ではない」、「夫は子どもよりも自分の生活を中心に考えている」といった父親の支援のなさ（4項目）については $\alpha = .836$ であり、尺度として十分な信頼性が得られた。項目についてはAppendixに示す。

#### 2) 父親の育児行動の評価

父親の育児行動に対する母親の評価を測定するために、西尾（2013）の父親育児行動リストを用いて、「1. 全くやってくれない」から「5. 非常にやってくれる」の5件法で回答を求めた。この尺度においては、「子どもをお風呂に入れる」、「子どもと一緒に遊ぶ」など、直接子どもに働きかける育児行動である「対子ども育児」と、「炊事、洗濯、掃除などの家事をする」、「母親に対してねぎらいの言葉をかける」など、育児する母親を支援することによって間接的に育児に関わる「対母親支援」の2因子構造が確認されている。ただし、対子ども育児項目が7項目であるのに対して、対母親支援の項目が4項目と少なかったため、「母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う」、「子どもができて、夫婦だけの時間を確保する」、「夫の両親との関係を上手に調整する」、「子どもができて、セックスストレスにならない」の4項目を追加した。

#### 3) 母親アイデンティティ

母親の「親としてのアイデンティティ」を評価するために、山口（2010）の親アイデンティティ尺度

及び母親アイデンティティ尺度を参考に、17項目を選択して用いた。「1. ぜんぜんそう思わない」から「5. まったくその通りである」の5件法で回答を求めた。

#### 4) 基礎的情報

①年齢, ②結婚した年齢, ③結婚期間, ④世帯収入, ⑤妻の収入, ⑥最終学歴, ⑦現在の就業形態について回答を求めた。①～⑤までは数値で自由に回答, ⑥～⑦については選択肢から1つ選択するよう回答を求めた。

## 【結 果】

### 1. 父親の育児行動の評価の因子分析

母親が評価した父親の育児行動15項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で2因子を抽出した（Table1）。

第1因子は「子どものオムツ、トイレの世話をする」、「子どものミルク、食事の世話をする」などの8項目で構成されていた。これらの8項目は西尾（2013）と同じく、直接子どもに働きかける育児行動を示す因子であると考えられ、「対子ども育児」因子とした（ $\alpha = .841$ ）。ただし、「炊事、洗濯、掃除などの家事をする」という1項目のみが先行研究と異なり、「対子ども育児」因子に含まれた。第2因子は「母親の話し相手になる」、「母親に対してねぎらいの言葉をかける」などの7項目で構成されていた。これらの7項目は先行研究の3項目と新しく追加した4項目からなる。育児する母親を支援することによって間接的に育児に関わる育児行動を示す因子であると考えられ、「対母親支援」因子とした（ $\alpha = .830$ ）。

Table1 父親の育児行動の評価の因子分析結果(最尤法, プロマックス回転)

	因子	
	1	2
子どものオムツ、トイレの世話をする	<b>.885</b>	-.045
子どものミルク、食事の世話をする	<b>.776</b>	.017
子どもと一緒に遊ぶ	<b>.697</b>	-.055
子どもの歯磨きを手伝う	<b>.680</b>	-.074
子どもをお風呂にいれる	<b>.651</b>	.047
炊事、洗濯、掃除などの家事をする	<b>.624</b>	.092
子どもを寝かせる	<b>.580</b>	.006
子どもの保育園、幼稚園などの送迎をする	<b>.289</b>	.043
母親の話し相手になる	-.021	<b>.860</b>
母親に対して労いの言葉をかける	-.003	<b>.758</b>
母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う	.158	<b>.715</b>
子どもができて、夫婦だけの時間を確保する	-.196	<b>.684</b>
夫の両親との関係を上手に調整する	.038	<b>.592</b>
母親の自由な時間を作るように努める	.180	<b>.463</b>
子どもができて、セックスレスにはならない	.025	<b>.323</b>
因子間相関		因子2
	因子1	.525

## 2. 母親アイデンティティの因子分析

母親の親としてのアイデンティティ17項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で4因子を抽出した（Table2）。山口（2010）では、母親役割認知、親役割評価、親役割受容の3因子構造とされていたが、本研究では同様の構造が認められなかったため、各因子の解釈のしやすさも考慮し、4因子構造を採用した。

第1因子は「人からダメな親だと思われるのではないかと不安である」、「自分は親として不適格なのではないかと思う」など4項目で構成されていた。これらの4項目は親としての不全感や自信のなさを示す因子であると考えられ、「親としての自信のなさ」因子とした（ $\alpha = .858$ ）。第2因子は「親としてやっていける自信がある」、「親として一人前だと思っている」など3項目で構成されていた。これらの3項目は親として現在感じている自信や、今後もうまくやっていけるだろうという見通しを示す因子であると考えられ、「親としての効力感」因子とした（ $\alpha = .773$ ）。第3因子は「子育てを楽しんでいる」、「親になってよかったと思っている」など4項目で構成されていた。これらの4項目は親としての役割を受容し、母親としての私を強く意識していることを示す因子であると考えられ、「親役割の受容」因子とした（ $\alpha = .735$ ）。第4因子は「親としてどうあるべきなのかまったくわからない」、「子育てよりも自分の生きがいを充実させることのほうが重要だと思う」など3項目で構成されていた。これらの3項目は親としての自分と向き合うことに不安を感じ、親役割を受け入れることを躊躇していることを示す因子であると考えられ、「親役割からの逃避」因子とした（ $\alpha = .798$ ）。

## 3. 調査協力者の基本属性

仮説の分析に入る前に、調査協力者の結婚期間、世帯収入、妻の収入、妻の最終学歴、現在の就業形

Table2 母親アイデンティティの因子分析結果(最尤法, プロマックス回転)

	因子			
	1	2	3	4
人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	<b>.981</b>	.085	.093	.050
自分は親として不適格なのではないかと思う	<b>.593</b>	-.183	-.192	.044
気持ちの上ではまだ親になりきっていない気がする	<b>.584</b>	-.073	-.204	-.124
親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	<b>.467</b>	-.150	-.098	.112
親としてやっていける自信がある	.265	<b>.875</b>	.191	-.060
親として一人前だと思っている	-.291	<b>.663</b>	-.141	.192
これまでも親として順調にやってきたし、これからも順調にやっていけると思う	-.150	<b>.655</b>	.060	.051
子育てを楽しんでいる	.002	.136	<b>.755</b>	-.052
親になって良かったと思っている	-.139	-.078	<b>.619</b>	.061
親として関わっている時が、一番自分らしいと思う	.063	.083	<b>.512</b>	-.058
「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.124	-.072	<b>-.355</b>	.123
親としてどうあるべきなのかまったくわからない	-.008	-.228	.236	<b>.991</b>
子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う	-.060	.287	-.233	<b>.642</b>
この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.297	.114	-.175	<b>.566</b>
因子間相関		因子2	因子3	因子4
	因子1	-.581	-.662	.568
	因子2		.594	-.518
	因子3			-.541

態などの特徴について述べる。まず、結婚期間については平均65.60ヶ月 ( $SD = 32.86$ ) であり、約5年間の結婚生活を送っていた。最も短い結婚期間は10ヶ月であり、最も長い期間は158ヶ月であった。

次に、世帯収入については平均874.29万円 ( $SD = 494.41$ ) であった。これは、厚生労働省の平成27年度国民生活基礎調査の30～39歳の1世帯あたりの平均所得金額558.9万円と比較しても、同調査による末子が3歳未満の世帯の平均所得金額643.1万円と比較しても高い水準にある。ただし、世帯収入については分散も大きく、最も所得の低い世帯が350万円、最も高い世帯が3000万円であった。

さらに、妻の最終学歴については、四年制大学が49名 (50.0%)、短期大学15名 (15.3%)、大学院15名 (15.3%) となっており、大学出身者が約8割となっていた。このことから、本研究の調査協力者は概ね高学歴とされる層であることがわかる。

最後に、現在の就業形態については、正社員38名 (38.8%) となっており、派遣や契約社員、パート、自営業、内職や在宅ワークを含め、何らかの職業に従事する者は60名 (61.2%) になった。これは共働きの世帯がやや多いことを示す結果である。

#### 4. 母親の育児ストレス、父親の育児行動、母親アイデンティティの基礎データ

仮説の分析に入る前に、以降の分析で使用する各変数についての記述統計及び相関分析の結果をTable3に示す。母親アイデンティティと育児ストレスとの間には様々な関連が認められ、心身疲労が高まるほど、効力感 ( $r = -.409, p < .01$ ) や受容 ( $r = -.471, p < .01$ ) は低下し、自信のなさ ( $r = .470, p < .01$ ) や逃避 ( $r = .395, p < .01$ ) が高まるという関係性が認められた。また、育児不安が高まるほど、効力感 ( $r = -.343, p < .01$ ) や受容 ( $r = -.384, p < .01$ ) は低下し、自信のなさ ( $r = .508, p < .01$ ) や逃避 ( $r = .478, p < .01$ ) が高まるという関係性が認められた。ただし、父親支援のなさについては自信のなさ ( $r = .225, p < .05$ ) や逃避 ( $r = .225, p < .05$ ) との正の相関は認められたものの、効力感や受容とは関連がなかった。その他、母親の年齢と受容 ( $r = -.273, p < .01$ )、世帯収入と自信のなさ ( $r = -.218, p < .05$ ) には負の関連が認められ、母親の年齢があがるほど親役割を受容することができないこと、世帯収入が高いほど親としての自信のなさ得点が低くなる、つまり自信を持っていることが示された。

Table3 本研究で用いる変数の基礎統計量と相関分析結果

	平均値	標準偏差	1.年齢	2.世帯収入	3.結婚期間	4.育児ストレス (心身疲労)	5.育児ストレス (父親支援なさ)	6.育児ストレス (育児不安)	7.育児行動 (対子ども育児)	8.育児行動 (対母親支援)	9.母親ID (自信のなさ)	10.母親ID (効力感)	11.母親ID (受容)
1.年齢	33.91	6.04											
2.世帯収入	874.29	494.41	.064										
3.結婚期間	65.60	32.86	.176	-.200									
4.育児ストレス(心身疲労)	2.99	0.81	.099	-.056	-.093								
5.育児ストレス(父親支援なさ)	2.25	0.88	-.024	-.042	-.076	.307 **							
6.育児ストレス(育児不安)	1.99	0.77	.012	-.136	-.144	.320 **	.256 *						
7.育児行動(対子ども育児)	3.53	0.82	.059	.071	.092	-.247 *	-.846 **	-.142					
8.育児行動(対母親支援)	3.18	0.82	-.044	.093	.055	-.384 **	-.604 **	-.214 *	.502 **				
9.母親ID(自信のなさ)	2.57	0.97	.113	-.218 *	-.077	.470 **	.225 *	.508 **	-.175	-.196			
10.母親ID(効力感)	2.86	0.79	-.162	.138	.079	-.409 **	-.154	-.343 **	.185	.295 **	-.623 **		
11.母親ID(受容)	3.84	0.66	-.273 **	.148	.042	-.471 **	-.106	-.384 **	.143	.213 *	-.659 **	.566 **	
12.母親ID(逃避)	2.36	0.85	.091	-.065	-.130	.395 **	.225 *	.478 **	-.112	-.190	.613 **	-.415 **	-.548 **

## 5. 育児ストレスと父親の子どもに対する育児行動が母親アイデンティティに及ぼす影響

各母親アイデンティティ（自信のなさ、効力感、受容、逃避）を目的変数とし、中心化した説明変数と交互作用項の効果を検討するために、HAD（清水，2016）を用いて階層的重回帰分析を行なった。まず、Step1に統制変数として母親の属性（年齢／世帯収入／結婚期間）を投入し、Step2に育児ストレス（心身疲労／父親支援のなさ／育児不安）と父親の育児行動（対子ども育児）を投入した。そして、Step3において育児ストレスと父親の育児行動（対子ども育児）の交互作用項を投入した。この分析を進めるにあたり、世帯収入を回答していない者が14名いたため、分析対象者は84名となった。Table4に階層的重回帰分析の結果を示す<sup>1)</sup>。

まず、母親IDのうち自信のなさについての結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2=.348$ ,  $F(7,76) = 8.72$ ,  $p<.01$ ），世帯収入で負の影響が認められる傾向にあった。また、育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で正の影響が認められた。つまり、収入が低くなるほど、また心身の疲労や育児不安といったストレスが高まるほど、母親としての自信を失ってしまうことが示された。

次に、効力感の結果について述べる。Step3で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2=.082$ ,  $F(10,73) = 3.92$ ,  $p<.05$ ），育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で負の影響が認められた。つまり、心身の疲労や育児不安が低いほど効力感が高くなることがわかった。また、育児不安×対子ども育児の交互作用項も有意であった。そこで、交互作用が認められた結果において、単純傾斜分析を実施した。対子ども育児の得点 $\pm 1SD$ を基準とし、育児不安の効力感への回帰を示したものがFigure1である。効力感では、父親の対子ども育児が低い場合（ $-1SD$ ）には育児不安の程度によって母親の親としての効力感に違いは認められないが、父親の対子ども育児が高い場合（ $+1SD$ ）には、母親の育児不安によって親としての効力感が異なり、育児不安が低い母親ほど効力感が高くなることが示された。

さらに、受容の結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2=.204$ ,  $F(7,76) = 4.93$ ,  $p<.01$ ），年齢で負の影響が認められた。これは、年齢が低いほど親役割を受容しやすいことを示す結果である。また、育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で負の影響が認められた。つまり、心身の疲労や育児不安が低いほど親役割の受容が高くなることがわかった。

最後に、逃避の結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2=.269$ ,  $F(7,76) = 4.83$ ,  $p<.01$ ），育児ストレスのうち育児不安で正の影響が認められた。つまり、育児不安が高いほど親役割から逃避することが示された。

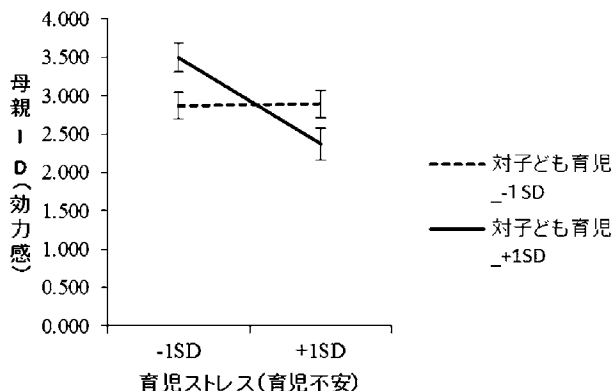


Figure1 効力感における対子ども育児別の単回帰直線



Table4 母親IDに影響する育児ストレス及び対子ども育児の階層的重回帰分析結果

説明変数	母親ID(自信のなさ)								
	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	-0.001	0.000	-.266 *	0.000	0.000	-.166 +	0.000	0.000	-.156 +
年齢	0.024	0.016	.161	0.019	0.013	.128	0.016	0.013	.107
結婚期間	-0.005	0.003	-.189 +	-0.003	0.003	-.105	-0.003	0.003	-.115
心身疲労				0.292	0.118	.229 *	0.265	0.118	.207 *
父親支援なさ				-0.026	0.126	-.022	-0.013	0.126	-.012
育児不安				0.596	0.117	.479 **	0.647	0.119	.520 **
対子ども育児				-0.073	0.128	-.061	-0.042	0.128	-.035
心身疲労*対子ども育児							-0.155	0.149	-.104
父親支援なさ*対子ども育児							-0.047	0.131	-.033
育児不安*対子ども育児							0.362	0.181	.195 *
$R^2$			.097 *			.445 **			.475 **
$\Delta R^2$			.097 *			.348 **			.030
説明変数	母親ID(効力感)								
	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	.180	0.000	0.000	.107	0.000	0.000	.081
年齢	-0.020	0.014	-.166	-0.016	0.012	-.127	-0.013	0.012	-.104
結婚期間	0.004	0.003	.155	0.002	0.002	.083	0.002	0.002	.091
心身疲労				-0.322	0.113	-.305 **	-0.296	0.109	-.280 **
父親支援なさ				0.130	0.120	.138	0.124	0.116	.132
育児不安				-0.297	0.111	-.288 **	-0.357	0.110	-.346 **
対子ども育児				0.079	0.122	.080	0.032	0.118	.032
心身疲労*対子ども育児							0.065	0.138	.053
父親支援なさ*対子ども育児							0.195	0.121	.164
育児不安*対子ども育児							-0.449	0.167	-.292 **
$R^2$			.061			.267 **			.349 **
$\Delta R^2$			.061			.207 **			.082 *
説明変数	母親ID(受容)								
	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	.187 +	0.000	0.000	.115	0.000	0.000	.096
年齢	-0.031	0.011	-.295 **	-0.027	0.010	-.257 *	-0.025	0.010	-.239 *
結婚期間	0.002	0.002	.103	0.001	0.002	.031	0.000	0.002	.025
心身疲労				-0.285	0.092	-.319 **	-0.266	0.091	-.298 **
父親支援なさ				0.124	0.098	.156	0.110	0.097	.138
育児不安				-0.231	0.091	-.265 *	-0.276	0.092	-.318 **
対子ども育児				0.085	0.100	.101	0.060	0.099	.072
心身疲労*対子ども育児							0.059	0.115	.056
父親支援なさ*対子ども育児							0.023	0.101	.023
育児不安*対子ども育児							-0.332	0.139	-.256 *
$R^2$			.108 *			.312 **			.364 **
$\Delta R^2$			.108 *			.204 **			.052
説明変数	母親ID(逃避)								
	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	-.105	0.000	0.000	-.025	0.000	0.000	-.013
年齢	0.018	0.015	.130	0.013	0.013	.098	0.015	0.013	.111
結婚期間	-0.004	0.003	-.162	-0.003	0.003	-.100	-0.002	0.003	-.084
心身疲労				0.176	0.119	.153	0.191	0.121	.166
父親支援なさ				0.072	0.127	.070	0.061	0.129	.059
育児不安				0.506	0.118	.450 **	0.496	0.122	.441 **
対子ども育児				0.117	0.129	.108	0.120	0.131	.111
心身疲労*対子ども育児							0.198	0.153	.147
父親支援なさ*対子ども育児							-0.134	0.134	-.104
育児不安*対子ども育児							-0.051	0.185	-.030
$R^2$			.039			.308 **			.329 **
$\Delta R^2$			.039			.269 **			.021

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## 6. 育児ストレスと父親の母親に対する育児支援が母親アイデンティティに及ぼす影響

先述した分析と同様に、各母親アイデンティティ（自信のなさ、効力感、受容、逃避）を目的変数とし、Step1に統制変数として母親の属性（年齢／世帯収入／結婚期間）、Step2に育児ストレス（心身疲労／父親支援のなさ／育児不安）と父親の育児行動（対母親支援）、Step3に育児ストレスと父親の育児行動（対母親支援）の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行なった。変更点は、父親の育児行動が、母親を支援することで間接的に育児を支える行動の評価を投入した点である。Table5に階層的重回帰分析の結果を示す。

まず、母親IDのうち自信のなさについての結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2 = .346$ ,  $F(7, 76) = 8.65$ ,  $p < .01$ ）、世帯収入で負の影響が認められる傾向にあった。また、育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で正の影響が認められた。つまり、収入が低くなるほど、また心身の疲労や育児不安といったストレスが高まるほど、母親としての自信を失ってしまうことが示された。

次に、効力感の結果について述べる。Step3で $R^2$ の有意な変化がみられ（ $\Delta R^2 = .094$ ,  $F(10, 73) = 4.40$ ,  $p < .01$ ）、育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で負の影響が認められた。つまり、心身の疲労や育児不安が低いほど効力感が高くなることがわかった。また、父親の支援のなさ×対母親支援、育児不安×対母親支援の交互作用項も有意であった。そこで、交互作用が認められた結果において、まず父親の支援のなさ×対母親支援について単純傾斜分析を実施した。対母親支援の得点 $\pm 1SD$ を基準とし、父親の支援のなさの効力感への回帰を示したものがFigure2である。父親の対母親支援が低い場合（ $-1SD$ ）には父親の支援のなさの評価によって母親の親としての効力感に違いは認められないが、父親の対母親支援が高い場合（ $+1SD$ ）には、母親の父親支援のなさの評価によって親としての効力感が異なり、父親からの子育てへの支援のなさを感じるほど、効力感が高くなることが示された。

また、育児不安×対母親支援についても単純傾斜分析を実施した。対母親支援の得点 $\pm 1SD$ を基準とし、育児不安の効力感への回帰を示したものがFigure3である。父親の対母親支援が低い場合（ $-1SD$ ）には育児不安によって母親の親としての効力感に違いは認められないが、父親の対母親支援が高い場合（ $+1SD$ ）には育児不安によって親としての効力感が異なり、育児不安を感じないほど、効力感が高くなることが示された。

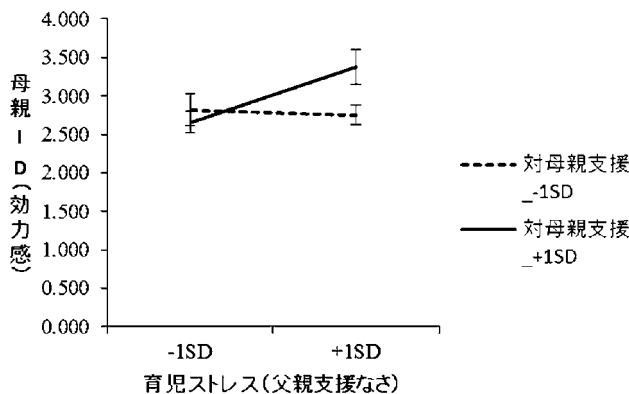


Figure2 効力感における対母親支援別の単回帰直線(父親支援のなさ)

Table5 母親IDに影響する育児ストレス及び対母親支援の階層的重回帰分析結果

母親ID(自信のなさ)									
説明変数	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	-0.001	0.000	-.266 *	0.000	0.000	-.171 +	0.000	0.000	-.165 +
年齢	0.024	0.016	.161	0.019	0.013	.126	0.021	0.013	.138
結婚期間	-0.005	0.003	-.189 +	-0.003	0.003	-.109	-0.003	0.003	-.105
心身疲労				0.300	0.120	.235 *	0.304	0.122	.238 *
父親支援なさ				0.029	0.122	.026	0.057	0.126	.050
育児不安				0.595	0.117	.478 **	0.621	0.120	.499 **
対母親支援				0.029	0.128	.024	0.045	0.130	.037
心身疲労*対母親支援							0.029	0.153	.019
父親支援なさ*対母親支援							0.037	0.136	.029
育児不安*対母親支援							0.147	0.169	.094
$R^2$			.097 *			.443 **			.457 **
$\Delta R^2$			.097			.346 **			.013

母親ID(効力感)									
説明変数	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	.180	0.000	0.000	.098	0.000	0.000	.084
年齢	-0.020	0.014	-.166	-0.014	0.012	-.113	-0.015	0.012	-.119
結婚期間	0.004	0.003	.155	0.002	0.002	.081	0.002	0.002	.093
心身疲労				-0.296	0.113	-.280 *	-0.315	0.108	-.298 **
父親支援なさ				0.170	0.115	.181	0.185	0.112	.196
育児不安				-0.297	0.110	-.289 **	-0.345	0.107	-.335 **
対母親支援				0.170	0.121	.171	0.141	0.115	.142
心身疲労*対母親支援							-0.151	0.136	-.116
父親支援なさ*対母親支援							0.269	0.120	.256 *
育児不安*対母親支援							-0.389	0.150	-.302 *
$R^2$			.061			.282 **			.376 **
$\Delta R^2$			.061			.222 **			.094 *

母親ID(受容)									
説明変数	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	.187 +	0.000	0.000	.118	0.000	0.000	.114
年齢	-0.031	0.011	-.295 **	-0.026	0.010	-.249 *	-0.027	0.010	-.262 *
結婚期間	0.002	0.002	.103	0.001	0.002	.035	0.001	0.002	.042
心身疲労				-0.283	0.094	-.316 **	-0.285	0.095	-.319 **
父親支援なさ				0.093	0.095	.117	0.072	0.099	.091
育児不安				-0.230	0.092	-.265 *	-0.244	0.094	-.280 *
対母親支援				0.033	0.100	.039	0.025	0.102	.030
心身疲労*対母親支援							0.047	0.120	.043
父親支援なさ*対母親支援							-0.048	0.106	-.054
育児不安*対母親支援							-0.105	0.132	-.097
$R^2$			.108 *			.307 **			.321 **
$\Delta R^2$			.108 *			.199 **			.014

母親ID(逃避)									
説明変数	Step1			Step2			Step3		
	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$	B	SE B	$\beta$
世帯収入	0.000	0.000	-.105	0.000	0.000	-.026	0.000	0.000	-.023
年齢	0.018	0.015	.130	0.015	0.013	.109	0.016	0.013	.121
結婚期間	-0.004	0.003	-.162	-0.003	0.003	-.097	-0.002	0.003	-.087
心身疲労				0.189	0.122	.164	0.190	0.123	.164
父親支援なさ				0.058	0.123	.057	0.085	0.128	.083
育児不安				0.507	0.118	.451 **	0.524	0.122	.466 **
対母親支援				0.103	0.129	.095	0.115	0.132	.106
心身疲労*対母親支援							0.030	0.156	.021
父親支援なさ*対母親支援							0.074	0.137	.064
育児不安*対母親支援							0.064	0.172	.045
$R^2$			.039			.306 **			.317 **
$\Delta R^2$			.039			.268 **			.010

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

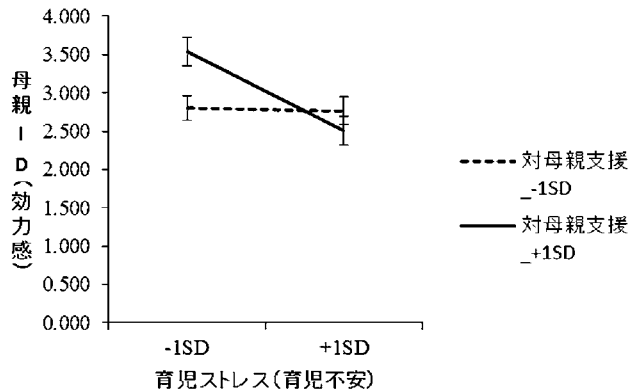


Figure3 効力感における対母親支援別の単回帰直線(育児不安)

さらに、受容の結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ ( $\Delta R^2 = .199$ ,  $F(7, 76) = 4.81$ ,  $p < .01$ )、年齢で負の影響力が認められた。これは、年齢が低いほど親役割を受容しやすいことを示す結果である。また、育児ストレスのうち心身の疲労及び育児不安で負の影響が認められた。つまり、心身の疲労や育児不安が低いほど親役割の受容が高くなることがわかった。

最後に、逃避の結果について述べる。Step2で $R^2$ の有意な変化がみられ ( $\Delta R^2 = .268$ ,  $F(7, 76) = 4.80$ ,  $p < .01$ )、育児ストレスのうち育児不安で正の影響が認められた。つまり、育児不安が高いほど親役割から逃避することが示された。

## 【考 察】

本研究の目的は、3歳未満の幼い子どもをもつ母親が親としてのアイデンティティを獲得していく過程で、育児ストレスと父親の育児行動がどのように関与するのかを予備的に検討することであった。

得られた結果について考察する。第1に、一貫して育児ストレスが母親の親としてのアイデンティティに関与していた。特に、心身の疲労や育児不安は母親が親としてのアイデンティティを肯定的に捉えることを抑制し、親としての自信のなさや役割からの逃避を促進することがわかった。これは仮説1を概ね支持する結果である。西尾(2015)によれば、父親の育児行動(対母親支援/対子ども支援)が頻繁に行われているほど、育児ストレスのうち「父親の支援のなさ」ストレスが低くなることが示唆されているが、本研究では母親が感じる育児ストレスが母親の親としてのアイデンティティの獲得を予測する可能性が示された。したがって、幼い子どもを抱える母親が「親としての自分」を肯定的に捉え、子どもや夫との生活の中で自分らしさを失わずに子育てを継続するためには、心身の疲労や育児不安といったストレスを軽減する必要がある。

また本研究では、母親が育児ストレスを抱えることが母親アイデンティティの獲得にどのように関与するかを明らかにすると共に、父親の育児行動がどのような役割を果たすのかについても検討を行なった。その結果、第1に「父親の育児行動の評価(母親支援/子供支援)が高い場合、育児不安が高まるほど母親としての効力感が低くなること」、第2に「母親に対する支援の評価が高い場合、父親が育児に参加しないというストレスフルな状況であるほど効力感が高まること」が示された。母親に対する支

援に関する結果を見れば、ソーシャル・サポートの緩衝効果（浦，1992）と一致して、ストレスフルな状況でこそ母親へのサポートが効果を発揮し、母親IDが肯定的に維持されるという解釈も可能であり、仮説が一部支持されていると結論することもできる。しかし、今回の結果を総じてみれば、仮説2については支持されなかったと結論することが妥当であろう。以下では、父親の育児行動が母親アイデンティティの獲得にどのような役割を果たす可能性があるのかについて考察する。

まず、父親が子どもに対して直接的に育児行動をとる場合でも、母親に対して間接的に支援することで育児を支援する場合でも、母親の育児不安が低ければ母親は親としての効力感を高めており、逆に母親の育児不安が高くなれば親としての効力感が低くなることがわかった。このような結果は、父親が子どもや母親に対して育児の支援をあまりとらないと評価される場合には認められない。本研究で検討した育児不安は、子どもの性格や容姿、知的能力などに気がかりがあり、子どもにどのように接したらよいか分からないことによるストレスであり、このようなストレスをあまり感じない状況で父親が自分に対しても、子どもに対しても精一杯サポートしてくれることが母親の親としての自信や効力感を培うことにつながると考える。一方、母親の子どもや子育てに関する不安が高まっている場合に、父親が育児に積極的に参加しようと努力すると、逆に母親の効力感を低下させてしまう可能性もある。このような状況に陥ってしまった場合、夫婦間のみでの努力では母親の親としての自信や効力感を回復させることが難しくなることが予想され、周囲の人々や専門家のサポートが必要になるのではないかと考える。

次に、父親が母親に対して育児を円滑にするような支援をしてっていると評価されている場合、父親の支援のなさによるストレスを感じるほど母親の親としての効力感が高まり、そのようなストレスを感じないほど効力感は低くなることが示唆された。つまり、母親は夫が自分の話を聞いてくれたり、愛情のある関係を維持してくれるなど、自分に対するサポートを積極的に行なってくれるが、子育てに関しては見当違いのものが多かったり、あまり積極的ではないとストレスを感じている状況で親としての効力感を感じていることになる。このような結果は、一見かなりの矛盾を抱えているようにみえる。しかし、今回の調査協力者の属性から推測すると共働きの家庭が多く含まれており、父親もある程度育児に参加していることがうかがえる。このような環境で、夫が母親に対しても十分にサポートをし、なおかつ子育てを優先的に考えて行動することは、本来自分が担うべき仕事においてサポートを受け過ぎていると感じる可能性がある。これまで、サポートを受け過ぎていると感じる者は与え過ぎていると感じている者より、負債感が強く、自尊心も低い（佐々木・島田，2000）ことが明らかになっており、社会的にも伝統的にも「子育て」は最も母親に期待される役割であるにも関わらず、その役割を遂行するにあたり、夫から支援を受けなければならないという現状が母親としての自信や誇りに悪影響を及ぼすと考える。また、子育てには正解がなく、自分の育ってきた環境を振り返ったり、同じように子育てをしている母親たちを真似たりしながら、自分のやり方を信じて、子どもと向き合うしかない。しかし近年、共働きの家庭は増え、夫が子育てに積極的に参加する社会へと変わりつつある。母親は子どもと向き合いながら試行錯誤の子育てをしなければならいだけでなく、夫とも向き合いながら、子育てに関する価値観や育ってきた家庭環境の違い、理想として描いている家族像や夫婦像などの違いなどをすり合わせていく必要があるのだろう。それらのズレを夫との間で調整する方法や、夫との間で生じた葛藤を解決する要因（e.g., 生育環境の類似性、会話時間やその内容）などについても検討する必要があると考える。

最後に、本研究の問題点と今後の展望について述べる。本研究の分析においては、母親アイデンティティを検討することを目的としているにも関わらず、今回子どもの年齢や人数などを考慮することがで

きていない。理由として、分析において扱う変数が多いにも関わらず、調査協力者を98名しか得ることができなかったという制約があった。また、子どもの年齢があがったり、人数が増えたりすることで、親に求められる具体的な役割は変わっていき、母親のアイデンティティも変容していく可能性が考えられる。その一方で、はじめて子どもを持ち母親になってすぐの経験が、母親のアイデンティティの形成には特に重要な意味を持つ可能性も十分にある。本研究ではそれらをふまえ、包括的な検討を行ったが、今後の検討においては、子どもの人数や年齢を考慮に入れた検討が必要であると考えられる。

総じて、今回の検討においては父親の子どもに対する直接的な支援より、母親に対する間接的な支援のあり方が問われる結果となった。本研究が横断的な調査であったことをふまえると、父親からの直接的な育児支援は母親の育児不安が高いために増える可能性もあり、母親支援の方が母親の肯定的なIDを維持するために重要であると直ちに結論づけることはできない。ただし、西尾（2014）においても育児ストレスに影響を与えていたのは対子ども支援ではなく、対母親支援であることが示されており、先行研究とも一致した結果であった。父親が直接的に育児を支援することの重要性が先行研究においても、社会的にも提唱されているが、妻と夫という「夫婦関係」を円滑にすることもまた、子育てに役立つという視点で検討されるべきではないかと考える。妊娠期や産褥期の夫婦関係には危機が生じやすいという結果もあり（丸山ら、2001）、子どもを得た夫婦がどのように親子関係へと移行していくか、夫婦をペアで縦断的に調査していく必要もあるだろう。

## 【謝 辞】

本研究は十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施されたものである。

## 【注】

1) 階層的重回帰分析の交互作用項の結果の記述については、Step1～Step3までの $\Delta R^2$ 値の有意性を確認し、Step3に交互作用項を投入することで説明力が変化した場合のみ報告することにした。理由として、Step2とStep3で説明力が変化しないにも関わらず、1つの交互作用項の結果を報告することで、過大な結果の解釈を避けるためである。母親に対する育児支援の結果についても同様に判断した。

## 【引用文献】

- Belsky, J., & Kelly, J. (1994). *The transition to parenthood*. New York: Delacorte Press. (安次嶺佳子 (訳) (1995) 『子供をもつと夫婦に何が起こるか』草思社)
- Katz, J., Monnier, J., Libet, J., Shaw, D., & Beach, S.R. (2000). Individual and crossover effects of stress on adjustment in medical student marriages. *Journal of Marital and Family Therapy*, **26**, 341-351.
- 厚生労働省 (2015). 平成27年度国民生活基礎調査  
 〈<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/dl/03.pdf>〉 (2016年9月16日)
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, **3**, 43-56.
- 丸山知子・吉田安子・杉山厚子・須藤桃代 (2001). 妊娠期・出産後2年間の女性の心理・社会的状態に関する調査：第1報 妊婦の心理・社会的状態 女性心身医学, **6**, 93-99.
- 宮木由貴子 (2014). 父親の子育てに関する一考察～30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識～ *Life design report*, **210**, 28-35.

- 内閣府 (2015). 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) レポート2015  
([http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/report-15/h\\_pdf/s3-4.pdf](http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/report-15/h_pdf/s3-4.pdf)) (2016年9月22日)
- 中村雅美 (2010). 母親の居場所感に影響する要因—アイデンティティ・夫婦関係・子どもの行動特徴など—  
白百合女子大学発達臨床センター紀要, **13**, 48-58.
- 中野円佳 (2014). 「育休世代」のジレンマ 女性活用はなぜ失敗するのか? 光文社新書
- 中澤智恵・倉持清美・田村毅・及川裕子・岸田泰子・木村恭子・森田千恵・荒牧美佐子 (2003). 出産・子育て  
体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (4) 第1子出生後の夫婦関係の変化と子育て 東京学芸大  
学紀要, **55**, 111-122.
- 西尾新 (2013). 母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響—育児頻度の評価及び父母間の評価の齟  
齬から—甲南女子大学研究紀要 (人間科学編), **49**, 59-74.
- 西尾新 (2014). 父親の育児行動の頻度および父親の育児行動に対する父母間の評価の齟齬が母親の育児スト  
レスに与える影響 甲南女子大学研究紀要 (人間科学編), **51**, 75-88.
- 岡本祐子 (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌,  
**47**, 849-860.
- 岡本祐子 (2010). 女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での成熟— 北大路  
書房
- 小野寺敦子 (2005). 親になることにともなう夫婦関係の変化 発達心理学研究, **16**, 15-25.
- Pridham, K., Lytton, D., Cang, A., & Rutledge, D. (1991). Early Postpartum Transition: Progress in Maternal  
Identity and Role Attainment. *Research in Nursing & Health*, **14**, 21-31.
- 佐藤小織 (2012). 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究—育児初期の  
核家族に焦点を当てて—日本助産学会誌, **26**, 222-231.
- 佐々木新・島田修 (2000). 大学生におけるソーシャルサポートの互惠性と自尊心との関係 川崎医療福祉学  
会誌, **10**, 249-254.
- 清水嘉子・関水しのぶ (2010). 母親の育児ストレス尺度—短縮版作成と妥当性の検討—子どもの虐待とネグ  
レクト, **12**, 261-270.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方  
法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- 周玉慧・深田博己 (2011). 夫婦間サポート獲得方略の使用類型がサポート受け取りと結婚の質に及ぼす影響  
心理学研究, **82**, 231-239.
- 山口雅史 (2010). 母親になるということ—母親アイデンティティを巡る考察 (椋山女学園大学研究叢書)  
あいり出版
- 浦光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—サイエンス社

## 【Appendix】

## Appendix1 CSS短縮版(清水・関水, 2010)

下位因子	項目
心 身 の 疲 労	1. 子どもの世話で他のやりたいことができない
	2. 子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる
	3. 子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い
	4. 夜間、育児のために何度も起きなければならなくて困っている
	5. 育児のために睡眠不足の日々が続いている
	6. 育児で身体の疲れが溜まっている
育 児 不 安	7. 子どもの知的能力に気がかりがある
	8. 子どもの顔つきや容姿容貌が気がかりである
	9. 同じ年頃の子どもの様子を知って、わが子が劣っているのではと不安に思う
	10. 子どもにどう接していいのかわからない
	11. 子どもの性格が気がかりである
	12. 育児のことを考えると、漠然とした不安を覚える
父 親 支 援 の な さ	13. 夫が子育てに協力的ではない
	14. 夫が私の育児生活の苦労を理解してくれない
	15. 夫は子供よりも自分の生活を中心に考えている
	16. 夫の子育ては不完全で、かえって迷惑なことをする

※ただし、本調査では「夫」を「父親」として尋ねた。